慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クリストファ・ ターナード ボリス・ プスカレフ共著 鈴木忠義訳編 国土と都市の造形
Sub Title	
Author	高橋, 潤二郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.6 (1967. 6) ,p.666(70)- 668(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19670601-0071
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670601-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

垂直貿易から水平貿易への構造変動、その構造変動の要因が分析されており、単なる歴史的・実証的分析にとどまらず、一つの理論の筋を通しての把握がなされていること。

第三に、これらの考察を通じて、日本の立場、日本貿易の環境・進路といった視点が十分に活かされており、こういった世界経済の動向下にあって、日本は今後どうしていったらいいかが明確化されていること。

第四に、個々の問題において、それぞれユニークかつ有意な数多くの理論・アイディア・実証研究がみられること、例えば、規範的概念によるドル不足の分析、合意的分業原理、中南米経済の「高原経済学」による研究、関税一括引き下げの効果分析、貿易結合度やシェア指数による貿易構造・比較優位の実証分析、交易条件の長期的下降傾向と上方硬直性や輸出前線や輸入依存度の山型変化の法則の指摘・発見等々である。

第五に、かかる理論的・実証的研究のみでなく、日本の立場を十分考慮しつつ、数々の政策提言がなされていること。例えば、レント・カレンシー構想、太平洋自由貿易地域構想、直接的生産目的援助等々である。

これらの諸点からも明らかなように、本書は入門書でありながら、それを越えるすぐれた理論的・実証的研究書であり、さらに読者に対して問題意識なり世界経済への関心をよびおこさずにはおかない魅惑的な啓蒙書でもある。勿論、数多くの内容・理論・アイディアをもり込みすぎているために、本書だけでは十分に理解できない部分もあり、さらにここにもり込まれた理論・実証分析・政策提言に関しては、ユニークかつ大胆であるが故に、あえていえば多くの問題点や疑問も存在する（一層詳細な著者の理論・考え方および問題点・疑問点については、拙稿の『本誌』一九六四年二月号、九月号および一九六五年九月号の研究ノート、新刊紹介、書評等を参照されたい）。しかし本書には、そういった不満や欠陥の指摘をひかえさせる何かがある。それは多分、著者の問題把握の確かさ・ユニークさ、問題意識の強烈さ、現実展開との関連の密接さ等々であろう。

とにかく、こういった問題に関心をもつ初学者のすべてに、本書の一読を推奨したいし、著者にならって多くの人々がこういった問題にとり組み、考え直してみることが是非必要であるように思われてならない。（日本経済新聞社・一九六六年一二月刊・B6・二七七頁・五〇〇円）

—深海　博明—

* * *

七〇　（六六六）

クリストファ・ターナード
ボリス・プスカレフ　共著
鈴木忠義　訳編

『国土と都市の造形』

原著"Man-made America"を読んだのは、たしか一九六三年滞米中であったが、数百頁に及ぶ本文の内容はもちろん、豊富な写真や図版の美しさに圧倒され、アメリカならではの仕事と感嘆した。こうした書物が我国で出版されるのは何時のことかと思ったのであるが、数年を経ずして、その訳書が原著と殆んど変りない体裁であらわれるとは！　何時ものこと乍ら、我国学界の知識欲とそのバイタリティにはおどろかざるを得ない。出版は最近SDを中心として活撥にこの分野の研究紹介に力をそそいでいる鹿島研究所出版会、訳者は工・農学関係の少壮の学徒が六人、東大工学部の鈴木忠義助教授が監訳編集にあたっておられる。

原著者の一人、ターナードは造園学と都市計画論の権威、既に一九三八年特色ある景観論を展開したGardens in Modern Landscapeを発表して以来、都市環境、というよりは生活環境一般について深い造詣をもち、現在、エール大学教授、その関係であろう、原著はエール大学出版から刊行されている。

本書の何よりの特色は、工業化、都市化によって急速に変貌しつつあるアメリカ国土の現状を特に視覚的デザインという側面から把えたことにあり、景観と美という問題が全体をつらぬく一つの糸となっている。全文四四一頁は、序文と結びを除いて、六部にわかたれ、その構成は、

第一部　都市の景観——人工都市の美
第二部　住宅団地——低密度住宅団地の美
第三部　舗装のリボン——高速道路の美学
第四部　技術の記念碑——産業施設、商工業地区の美
第五部　オープン・スペース——レクリエーションの美
第六部　将来への重要課題——史跡の保存

となっている。このうち、第一部は景観一般論ともいうべきもので、現在のアメリカの景観における様々な問題点が人口の定着パターンとの関連において指摘されている。二部以下六部まではサブタイトルであきらかなように、生活環境の主要な側面、住宅、道路、商工業施設、レクリエーション地区そして史跡に関して審美的見地から現状とそのあるべき姿を詳述したものである。豊富な写真と図版が随処にはさまれ、まさに著者の視覚的世界観の表現ともいうべきものであり、この意味で「見る」ことを強調している。とはいいながら、単に「見て楽しむ」という気軽な態度で本書を開いた読者は恐らく後悔するだろう。本書は単に「見る」だけでなく「読む」能力をも要求しているからである。内容はかなり専門的かつ知的なものであり、記述は種々様々な対象について、ある場合には冗長とも思える程詳細に行われているから、本書を読了して、アメリカの景観について、一つのヴィジョンをもつにはかなりの理解力と綜合力とが必要でもある。

主題が視覚的デザインに限定されていることからいって、内容が設計計画、要するに土木工学的になるのはいたしかたない。デザイン上の原理、技術の選択、これらすべてが著しく普遍的・一般的方向において議論されているのが本書の特色でもある。その結果、生活環境について記述しているにも拘らず「土の匂い」「生活の匂い」が消え失せてしまう傾向のあることは否定し得ない。たしかに、社会経済的側面にも周倒に言及されているが、しかしここには景観を考える上で基本的に重要な視角、即ち文化的（カルチュアル）なそれが欠けている。景観を人間がつくりだしてゆくもの、景観の美というものは人間のみに通用するものである以上、われわれ個人々々の行動と物の見方を規制する文化の存在を前提しないでは、これらについて語ることはできない。少くとも極めて重要な部分をミスすることになる。最近の人間工学や行動科学の発達によって、たしかに、われわれは「最適な」生活環境を設計するために有効な多数のインフォメーションをたくわえつつある。しかし、「最適」とは一体何か、又、何故人々は「美しからざる」状態に身を横たえて平気でいるのか、いやむしろそれを安住の地とさえ考えているのか、ハレムの黒人が考える美と、パークアヴェニューの住人のそれとは果して同じものであろうか、又、ニューイングランドの農夫はニュージャージー州の工員と同じ景観への反応を示すであろうか、これらはすべて文化を中心に考えなければ解答し得ない問題であろう。

ともあれ、本書と対比して、man-made

Japan とは何かを考えることは、知的トレーニングとして絶好のものといえるであろう。

（鹿島研究所出版会・昭和四一年刊・A5・四四一頁・五六〇〇円）

—高橋潤二郎—

＊　＊　＊

J・E・ミード著
北野熊喜男・木下和夫訳
『経済学入門
——分析と政策——』

ケンブリッジ大学の正教授として知られるJ・E・ミードの名著 An Introduction to Economic Analysis and Policy, 2nd ed. 1937 の改訳版が公刊されたので、この欄を借りて紹介しておこう。既に昭和二七年に、同じ北野・木下両教授による翻訳が上梓されていたのであるが、久しく再版が見送られていたため、稀少本の一つになっていたものである。

第一部は「失業」と名づけられているが、たんに労働の不完全雇用のみならず、広く資源一般の不完全利用をも意味している。この意味での失業を最初に取上げるのは、まだ満たされていない多くの必要があるにもかかわらず、資源の一部が未利用のまま残されていることは、最高の生活水準を達成するためには最も緊急に解決を要する問題だからにほかならない。ところで、消費者は、資源の完全利用によってもたらされる財・サービスを、彼らの受取る所得で全て購入しうるであろうか。この問題に決定的な役割を演じているのが追加投資と貯蓄であることを、著者は数字例を用いて巧みに説明する。言うまでもなく、ケインズ流のマクロ・モデルのエッセンスである。次いで、追加投資を決めるものが利子率であること、そして利子率は中央銀行の行う証券の売買によって左右されることが明らかにされる。利子率が投資に及ぼす影響については、その後も議論の絶えないところであるが、いずれにしても、その古典的な説明を十分理解しておくことは大切である。もちろん、貨幣当局による利子率の引下げだけで不況が克服されるという保証はない。その場合の他の有力な手段は公共投資であるが、その財源についても、著者は、税収ばかりでなく中央銀行からの借入れも辞すべきではないとして、フィスカル・ポリシーの適切な運用を説いている。

第二部　競争と独占　では、まず完全競争の定義が述べられ、そこから、経済原論で学ぶ著名な命題が次々に導かれる。しかし、ここでの中心的な課題は、教科書にはあまり出てこない、完全競争のもたらす不利益と、完全競争そのものが達成されないために生ずる不利益に関する分析である。前者のうちには、社会的には必要であるにもかかわらず私的企業によっては遂行されない経済活動、消費者の無知によって生ずる問題、煤煙や排水設備のように私的費用と社会的費用との乖離によって起こる問題などが含まれるが、著者はここでこの種の問題に対する政策的配慮の重要性を強調する。さらに、現実の社会には完全競争それ自体を妨げている要因も少なくない。自然独占や輸送費あるいは商品の差別化もその一つであるが、それにもまして重要なのは大規模生産の利益である。この利益が認められる場合には、完全競争が予定しているような価格支配力のない小企業が多数存在するという状態は、資源の効率的利用という観点からも決して望ましいことではない。しかるに一方、適正規模が大きく、したがってそれに要する資本が巨額になれば、いきおい独占的傾向が強まることは避けがたい。このような弊害を除去するための著者の提言は、経営の社会化についての見解とともに、わが国の

産業政策にも多くの示唆を与えてくれる。（以上　上巻）

第三部では所得分配の問題が扱われる。ところで、ある人にとって所得の増加が限界効用の逓減をもたらすとしても、すべての人が同じ必要と趣好を持っているわけではないし、また、一定の国民所得から得られる総効用を極大にするには、各人の限界効用が均等になるよう所得分配をすればよいとしても、そもそも個人間の効用を測定することが不可能である。しかしそう言ってしまったのでは、所得分配に関する経済的な議論は全てその基礎を失ってしまう。そこでミードは、常識的な意味で、百万長者よりも飢えに瀕している人間のほうが、また、未婚者よりも子供の多い既婚者のほうが、同じ所得でも得る効用は大きいと仮定し、さらに、個々人の間の必要や趣好にも大きな差異はないものと仮定した上で、所得不平等の原因、所得分配と完全競争との関係等を検討する。そしてそこから導かれる政策提言の骨子は、賃金や価格を規制して不平等を是正するよりも、所得税、相続税および振替所得によって直接再分配を行うほうが望ましいという主張である。なお、ミードが所得分配における教育の効果を重視し、教育費の問題を限界生産力説によって解明しているところは、わが国の教育問題を考える上で何かと教えられることが多い。

第四部では、第一次生産要素、すなわち土地、労働、資本の供給とその最適利用の問題が取上げられる。それらは、いわば限界生産力理論の応用問題であるが、ここでもその説明は丁寧でしかも明快である。

最後に第五部で、これまでに述べられた問題が、一国内という枠をはずされて、国際的な視野から再検討される。国際経済は著者の十八番の一つであるが、金本位制と輸出入均衡のメカニズム、為替管理による国内均衡と国際均衡の調整、比較生産費説、保護貿易論と読み進むにつれて、われわれは知らず知らずのうちに国際貿易論の核心に案内される。読者がそこから、貨幣賃金の引下げが困難でしかも技術革新に遅れをとった国（例えば今日のイギリス）がなぜ国際収支の赤字に悩まされなければならないかを読みとることは容易であろう。その場合、当面唯一の解決策がポンドの切下げ以外にないことを、かつてイギリスを散々悩ませた日本の安い綿製品の輸出を例に懇々と説いているのも興味深い。

ところで、原書の第二版が出版されたのは一九三七年のことであるから（ただし、ケインズの『一般理論』およびロビンソンやチェンバレンの不完全競争に関する著作は十分参照されており、中でもロビンソンには第一部から第四部までの原稿を通読してもらっている。——初版序文——）、本書によって最近の理論を知ろうとしてもそれは無理な注文である。しかし、現実の政策的課題の中から経済学のエッセンスを浮彫りにした本書は、今日なお第一級の経済学入門書としていささかもその輝きを失っていない。とりわけ、これから研究テーマを探そうという人にとっては、格好の手引きとなるであろう。（東洋経済新報社・昭和四一年一二月上巻・翌年一月下巻刊・B6・五〇六頁・一三二〇円）

—鈴木　守—

＊　＊　＊